

分かる！快感！

Z会ナビ

算数

理科

社会

お題

種子島に鉄砲をもたらしたのはどんな船か？

(名古屋大学 2018年 日本史)



次の史料は、日本の僧侶が執筆した「鉄砲記」を書き直したものである。これを読んで以下の問いに答えよ。

1543年、種子島の島内の小浦にひとつの大船が現れた。どこの国から来たのかははっきりしない。船員は100人あまり、見慣れない姿で、言葉は通じず、奇怪に感じられた。その中に、明の国の五峯と名乗る、正式な姓名はわからない者がいた。種子島の織部丞という者は読み書きがよくできたので、五峯と面会し、杖をもって砂の上に次のように書いた。「船員の方々はどこの国の方なのでしょう。なぜ変わった姿をしているのでしょうか」。五峯が次のように書いて答えた。

「彼らは西南の辺境からやってきた商人たちです」。このとき島の領主であった種子島時堯は、彼らが所持していた鉄砲の試し撃ちをみて、値段が高いのも顧みずに購入し、その製造法を学ばせた。

問 下線部に関連して、このとき種子島にやってきた船は次のどちらであった可能性が高いと考えられるか、史料文中の根拠を示しながら説明しなさい。

A：中国式の船

B：ポルトガル船



イラスト：瑞木匠

密貿易が盛んな時代だった

かな、と思いつきそうですね。そのように読み取っていきくと、問題の答えは「B：ポルトガル船」が有力でしょうか。しかし、五峯の船にポルトガル人が同乗してやってきたと考えたとすると、「A：中国式の船」も答えになりそうです。

実はこの問題では、A・Bどちらが正しいという答えは出ません。知識ではなく、史料を読み取り論理的に説明する能力が求められているので、A・Bどちらでも、きちんと説明していれば正解です。では史実はどうだったのでしょうか。

ほかの情報を確認する

鉄砲が伝来した当時、明は人々が自由に海上を行き来したり、交易をすることを禁止していました。その中で、東アジアでは国との間の正式な交易ではない密貿易が盛んに行われるようになり、中国人を中心とする倭寇と呼ばれる集団が密貿易を取り仕切っていました。「鉄砲記」に出てきた五峯も、長崎の五島列島周辺で活躍していた倭寇のリーダーでした。

倭寇は東アジア周辺地域のみならず、大航海時代の始まりによりアジアに進出していたポルトガルやスペインなどのヨーロッパの商人とも密貿易を行っていました。中国の五峯とポルトガルの商人のつながりは、こうした密貿易のやり取りの中で生まれたと考えられます。

ここで、もうひとつ別の史料を見てみましょう。鉄砲伝来の数十年後にポルトガルで出版されたアントニオ・ガルワンの「世界新旧発見史」には、1542年にシャム王国（現在のタイ）から3

人のポルトガル人が脱走して、倭寇の船に乗り込み、中国をめざしたところ嵐に見舞われ日本に着いたことが書かれています。ほかにも、ポルトガルやスペインで出版された本の何点かに、1540年代に日本を発見したことが書かれており、年代に少しずれが見られるものの、この時期に密貿易を利用してポルトガル人が日本にやってきたことは事実と言えそうです。

このように、「鉄砲記」だけではA・Bどちらの船で来たのか判別がつかなかったのですが、ほかの情報や史料とあわせて考えると、当時密貿易で活躍していた五峯の船にポルトガル人が乗り込んでやってきたと考えることができ、「A：中国式の船」が有力であるとわかります。

(Z会・河原井彩)

！
今回の
教訓

情報は1種類だけでなく、複数のものを参考にすることで、事実の理解に近づくことができます。歴史の学習だけでなく、私たちの身の回りのことを考えるうえでも、留意したいですね。



河原井彩さん 2007年に入社。大学受験用の日本史、政治・経済の教材編集を経て、現在は中学生・高校生向けの社会科教材を担当。新潟県生まれの埼玉県育ち。

史料の内容を読み取る

日本の戦国時代に大きな影響を与えた鉄砲。日本に伝来したのは、現在の鹿児島県にある種子島でした。今回は「鉄砲記」の内容から、鉄砲伝来について見ていきましょう。

今回引用している部分には、種子島にやってきたのがどのような人たちだったのかが、種子島の住民の目線で書かれています。

種子島にやってきた船に乗っていたのは、見慣れない姿の言葉が通じない人たち、その中に明（現在の中国）の五峯と名乗る人物がいました。五峯によると、船に乗っているのは「西南の辺境からきた商人たち」だと言います。鉄砲伝来について知っている人なら、ポルトガル人のこと